

藤沢レオ

Sculpture of Place

柱の研究

作品リスト

作品名	素材	設置場所	制作年
起点のモニュメント	ステンレス・鉄	モエレ山	2021
柱の研究—起点—	オニグルミ・木・真鍮箔・レンガ・鉄	ガラスのピラミッド 1F アトリウム	2021
柱の研究—起源—	オニグルミ・レンガ・真鍮箔・鉄	ガラスのピラミッド 2F スペース2	2021
起源のモニュメント	オニグルミ切株・真鍮箔	サクラの森	2021



藤沢 レオ FUJISAWA Leo

Profile

1974年虻田郡洞爺湖町生まれ。
1997年道都大学美術学部デザイン学科卒業。
鉄や木、繊維などを素材に、工芸、彫刻、インスタレーション、舞台美術等ジャンルを横断しつつ、自身の死生観をもとに、種子をモチーフにした鉄彫刻作品《パサージュ》をはじめ、日常に隠れた重要な要素を可視化する糸の集合による彫刻《不在の存在》、身近な幸福を見つめ直す鉄線による彫刻《静かな日》、そして近年は人類の足跡を辿る生存の起源や場の発生について思索する《場の彫刻》に取り組む。またアートを媒体として社会との積極的な関わりを続ける「NPO法人樽前arty+」のディレクターも務め、美術展企画やワークショップ、レクチャーも行っている。

作家になったきっかけを教えてください

大学生時代は絵画をやっていました。デザイナー志望で就職活動を始めた大学三年生の頃は、ちょうど手描きからPCの版下に移行する時期で、これからはPCの時代だなど思っていました。でも、やっぱり手で何かモノを作っていたいなと考えていた頃に、たまたま二七コの澤田正文さんという造形作家の方のもとを訪れたんですね。その瞬間に、この道でいきたいと雷で打たれたように感じまして、それでアーティストの道へ進むことになりました。

これまで手がけてきた作品について教えてください

最初は、銅板を叩いて鍋を作るとか、金属を使って家具を作るとか、店舗のサインを作るとか、ずっと工芸の仕事をしていたんです

が、三十歳になる頃に自分だけの表現を見つけないなと思って、それから彫刻の道へ進むことになりました。

「場の彫刻」シリーズについて

当初は鉄を使った彫刻をずっと作っていたのですが、その一方で、私のスタジオがある苫小牧市樽前地区というところでアートNPO(樽前arty+)を立ち上げて、学校をまわってワークショップをしたり、教育委員会と一緒に事業を企画するようになってきました。樽前という過疎地域でそうした活動をする中で、ワークショップの中にもあるような場の発生は、与えるものではなくて、自分たちで見つけて立ち上げるものなんじゃないかと考え始めました。その時に、《場の彫刻》という作品が同時に立ち上がってきたというか。アートではないような、社会と交わる活動の中で、場のあり方や立ち上げ方を考えるようになりました。

「柱の研究」シリーズについて

《場の彫刻》の第一作目は、ある森の中に一本の柱を立てるところから始まりました。それは、先ほどのワークショップにも似た考えですが、森の中の無名の場所に柱を一本立てるといふきっかけが、どのようにそこにいる人たちに作用を与え、その人たちがどういう行動に移すかということに興味があったんです。その時は、一つのきっかけであって柱がメインではなかったんですけども、だんだんとシリーズを重ねるごとに、「柱ってどこから来たんだろう？ それって僕らの命が紡がれてきたことと実は密接に関係あるんじゃないかな？」という予感の中で、柱をメインに据えたシリーズが始まりました。

モエレ沼公園での作品制作について —クルミ、鉄、真鍮

最近、特に集中して「柱の研究」のシリーズを制作していたので、展覧会のお話をいただいた時にすぐに今度はどんな景色にしよかなと考えました。モエレ沼公園はイサム・ノグチが設計したランドスケープですが、この、人の手が加わった景色がすごく北海道的だなと思っています。開拓の歴史を考えたも、農業でも、防風林なんかは人の手が加わっていたりして、意外に北海道は原生林が少なかったりするわけですね。そういう場所自分に手を加えた景色を置くということとは、割とすんなりイメージできたんです。「柱の研究」シリーズには、こういう樹種がふさわしいのかなと考えて…。これは僕

のイメージですが、人類の足跡をたどるような旅の中で、洞窟生活をしていたような、冒険者でもなく、ヒーローでもない、コミュニティから弾かれたような人たちが、実は最初の第一歩を踏み出したんじゃないか。大地を歩きながら木の棒を拾ってその日暮らしの家を建てる、そうやって大陸を移動してきて日本や南アメリカまでたどり着いたんじゃないか、と考えています。その中で、北半球のどこにでもなっている身近なものでもあるし、きつと良い食料、良い材料として存在していて、人類の足跡の中でも重要な要素だったんだらうと思いついて、オニグルミを選んでいきます。それに、スタジオのある樽前にもたくさん生えているので身近な木でもあります。それを担当学芸員の宮井さんとお話ししていた時に樹木管理の方から、ちょうど間伐をする時期のオニグルミの木があると話を伺って…。それで今回の展示の風景がすごく具体的に頭の中に浮かんだんです。

まず、どの木を間伐するかを教えてください、森の中を歩きながら探して、今回メインに据えている一本の木に出会いました。私の意志で間伐するのは初めてだったので、なにか木と同じ痛みを味わえないかなと思っただけです。それで、チェーンソーで一瞬で切り崩すのではなく、せめて自分も少しは苦勞しながら人力で倒したい。この木と同じ時間を過ごせるわけではないですが、自分の時間になるだけ使って切り倒したいなと思いついて作ることにしました。

それで、オニグルミを石斧で切り倒すことになったんですけど、あえなく壊れてしまい、途中で鉄の斧に持ち替えました。それは衝撃

的な破壊力で、石斧から鉄斧になっただけで驚くほどの切れ味なんですね。これが鉄の力なんだと実感しました。



サクラの森で
オニグルミの木を斧で倒す藤沢氏
(撮影:2021年5月26日)

鉄というのは非常に不思議な素材で、鉄器時代が人類史を大きく進めたと思うんですが、その多くは武器としての鉄です。鉄を制する者が国を制するという武器としての鉄の破壊力にも思い至りましたし、産業革命後、鉄によってこの世界が塗り替えられ、スピード感が上がっていくという歴史を、木を切り倒しながら感じるわけですね。鉄、恐ろしいなと。

確かに鉄は人類を豊かにしましたが、一方で、多くの人々を殺すようにもなりました。オニグルミも同じように、人々の食料や住居として豊かにしてきたけれども、今では銃床という、銃を使う際、肩に当たる場所にクルミの木が使われているんです。人を守ってきた素材が、一方で人を殺めていく。その矛盾をどう可視化していったらいいんだろう、ということが僕のなかで一つの大きなテーマです。鉄にしてもオニグルミにしても、同じような考えの中で使っています。

今回の作品では切り倒した木を顕彰して、

記念碑(＝モニュメント)にしたいと思ったんです。すべてを金彩することによって、太古の昔を想像できたら、と。それはツタンカーメンのような黄金の遺物のようでもあり、でも、木というすごくありふれた素材でもある。そこにも矛盾があるんですが、そういった記念碑にしたいと考えました。

どうして金ではなく真鍮を使っているかというの、先ほども話したように、仲間になれず洞窟から飛び出した人々が実は今の世界を作り始めたとするなら、特別じゃない方がいいだろうと考えたからです。その行為は、決して当時の人たちも特別だとは思っていません。ある意味、仕方なくそうやってしまった。それでも今の世界を作り始めたということが自分の中でとても重要でーだから、特別な金ではなく「貧者の金」とも言われ、金の代用品である誰でも手に入るような素材でこの記念碑を輝かせたいと思いました。

屋外の展示作品について

《起源のモニュメント》は、切り倒したオニグルミの木の切り株なんです。間伐ということなので、伐根してしまうと聞かされていたんですが、できれば会期中は残して、それも一つの足跡として作品化したいと思い、金彩をしてこっそり残しています。それは、会期が終われば根を抜かれて処分されてしましますが、その刹那も一つのモニュメントに対するテーマなのかなと思いついて。さまざまなモニュメントが、戦前から戦中や戦後にかけて建てられましたけど、すでに残っていない記念碑もたくさんある。それはなぜ残らなかった

のかと考えると、結局、時代にそぐわなくなったということなんですね。価値観が変わってしまったということがあると思うんです。記念碑という永遠のように感じるけれど、我々の価値観でコロコロと変わってしまうという、それも記念碑の二つの悲哀かなと思いついて。今回は刹那ではあるけれども切り株をモニュメントとして残したいと思って作りました。

モエレ山の山頂の《起点のモニュメント》は、ステンレス製で四メートルの木の枝と柱が同一化したような形状をしています。せっかくながらモエレ沼公園でやるのなら、イサム・ノグチと少しでも対話してみたいなと思いついて、台座の一部を欠くことによってもともと設置されている三角点に記載されているノグチへのメッセージが垣間見えるようにしました。また、

メインとなるギャラリースペースからは、この山頂の作品や、アトリウム二階にある作品も見ることが出来ます。これだけ大きく広大な設計のもとに作られた公園なのだから、ギャラリーの中だけを感じて帰ってしまうのは非常にもったいない。モエレ山へ行けない人に対しても、視点として遠くを見られるような仕掛けを作りたいなと思いつきました。そこにも、あそこにも作品があるはずだと。そうして、今ここに立っているという、空間の広さや遠さみたいなものも体感していただけるといいなと思いついて、少し離れた位置にも作品を設置することにしました。



《起点のモニュメント》2021 モエレ山頂上



《柱の研究-起源-》2021 展示風景

コロナ禍で作品を発表すること

作品を作り始めてから長く、日常の些細な豊かきみたいなものを描きたいなと思っただけです。それは例えば、自分の命や家族の命、友人の命など―それってあまりに当たり前すぎて、普段強く意識することが少ないと

きたんですが、このコロナ禍になってからは、それがものすごくまっすぐ伝わるなと強く感じています。幸い、こういう状況になってからも多くの展示をやらせていただけていて、その度にお客さんのリアクションがストレートに来るということに驚いています。今まで些細すぎて伝わらなかったような部分がある

思うんですよ。僕はそれを常に強く意識して暮らしていて、一方で「死」についても意識するんです。誰もがいずれ死ぬのにもあまり意識して生きていないということをおぼやかり、それから強く意識するようにしています。日常の中にあるそんなに大きなことが、あまりにも見過ごされているんじゃないかと。それは自分自身も相当見過ごしてきたなと思っていて、だから、自分に対しても作品を作っているわけです。

そういう些細なことを、いろいろなアプローチやいろいろなシリーズで作ってきたんですが、

すごくまっすぐ伝わるようになった。

コロナ禍になって多くの人が遠出もできず、家にこもって自分や家族と対話しているのか、そういう状況の中で、もともと持っていた幸せとか豊かさが露わになってきているんじゃないかなと感じるんですね。だから、コロナ禍はこの世界を非常に困難なものにしましたが、一人一人個人の幸せや暮らしというのは、より洗練されていくんじゃないかなとすごく希望を抱いています。その中で展示が出来るということは、自分の制作を進めることになりまして、さらに深い視点で作り続けられるんじゃないかなと思っています。

今後の作品の展開について教えてください

今回展示している《柱の研究》は、もって作っていきなと新たに思っています。今回は、幸いにも、ここで育ち、自分の手で切り倒した一本のオニグルミの木から、枝分かれして二つの森のようなインスタレーションが生まれるという、すごく良い体験をしました。イサム・ノグチの作った場所ということは、僕にとつてすごく大事なことで、色々なインスタレーションやイメージーションを与えられました。この作品シリーズももつと深い内容にたどり着けるんじゃないかなという予感がしているので、まずは《柱の研究》を、さらに研究したいなと思っています。

(収録二〇二二年七月二十二日)



展示会場に配布している本展のサイドストーリー

インタビューの様子は
YouTubeでもご覧いただけます



<https://youtu.be/dVLIJgK05uM>